平成二十三年度

国　語（記述式）試　験　問　題

（人文・社会科学専攻）

（注意）一、各問題の設問の数に注意せよ。

二、解答はすべて別紙解答用紙の定められた欄におさまるように記入せよ。なお、一行に相当する枠に、二行以上にわたって記入してはならない。正しく記入されていない場合には採点されないので注意せよ。

三、解答文中の誤字（仮名づかいの誤りも含む）は、その程度に応じて減点する。

1

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

この部分に記載されている文章につきましては、著作権上の問題から掲載することができませんので、ご了承願います。

この部分に記載されている文章につきましては、著作権上の問題から掲載することができませんので、ご了承願います。

この部分に記載されている文章につきましては、著作権上の問題から掲載することができませんので、ご了承願います。

この部分に記載されている文章につきましては、著作権上の問題から掲載することができませんので、ご了承願います。

この部分に記載されている文章につきましては、著作権上の問題から掲載することができませんので、ご了承願います。

この部分に記載されている文章につきましては、著作権上の問題から掲載することができませんので、ご了承願います。

この部分に記載されている文章につきましては、著作権上の問題から掲載することができませんので、ご了承願います。

（小坂井敏晶氏の『異文化受容のパラドックス』による）

＊（注）加藤周一――評論家。日本文化や近代文学の本質を論じた著作が多数ある。

鶴見和子――社会学者。日本の民俗学者や社会史を多く論じた。

ジョージ・サンソム――イギリスの外交官・日本研究者。昭和初期に来日し、日本に関する著作を多く発表した。

丸山真男――政治学者。日本の思想や政治思想の歴史とその本質を論じ、戦後日本の思想界に大きな影響を与えた。

シャーマニズム――シャーマン（霊と交流する職能者）を介して霊的存在と交流し、託宣や治療等を行う宗教現象。

錬金術――価値の低い金属から金などの貴金属を生み出すための方法。無から有を生む方法を広く指すこともある。

〔設　問〕

㈠　片仮名傍線部(1)～(5)について、それぞれ漢字二文字に直して記せ。

(1)　ガンキョウ　(2)　ゲドク　(3)　ダトウ　(4)　ホウキ　(5)　ヒンパン

㈡　波線部(1)～(5)の漢字について、それぞれその読みを平仮名で記せ。

(1)　浸潤　(2)　敷衍　(3)　前掲　(4)　渾然　(5)　齟齬

㈢　点線部(あ)～(お)について、それぞれその読みを平仮名で記せ（漢字部分の読みだけを記入すること）。

(あ)　害われる　(い)　著しい　(う)　携わる　(え)　曝され　(お)　免れて

(四) 二重傍線部(イ)の〈和辻哲郎〉が日本文化や社会の特質を論じた著作として、最も適当なものを次からひとつ選び、番号で記せ。

(1) 『「いき」の構造』
(2) 『武士道』
(3) 『風土』
(4) 『菊と刀』
(5) 『東洋の理想』

(五) 空欄 I に入る言葉として、本文の論旨に照らして、最も適当と思われるものを次からひとつ選び、番号で記せ。

(1) 不即不離
(2) 二律背反
(3) 自家撞着
(4) 表裏一体
(5) 一触即発

(六) 空欄 II に入る語として、本文の論旨に照らして、最も適当と思われるものを次からひとつ選び、番号で記せ。

(1) 関連性を持たない要素の氾濫
(2) 互換性を持たない知識の過剰
(3) 親和性を持たない意識の拡大
(4) 共通性を持たない文化の獲得
(5) 類似性を持たない認識の増加

(七) 二重傍線部(ロ)に〈キリスト教徒がほぼ不在といってよい日本の状況〉とあるが、そのような状況に至った最も根本的な要因として筆者が考えているものを、本文の論旨に照らして、次からひとつ選び、番号で記せ。

(1) 非排他的宗教としてのキリスト教は日本文化の内部でその固有の性格を大きく変えられた上で受容されたから。

(2) 一六世紀以降の日本で繰り返された苛酷な宗教弾圧がキリスト教の信者の数を極端に減少させてしまったから。

(3) 外来の事物を「よそ者」として拒絶する強力な〈土着〉の保守性が日本の社会には一貫して発動していたから。

(4) 絶対神を崇拝する超越的宗教であるキリスト教は本質的に多神教的な日本の宗教的土壌にそぐわなかったから。

(5) 西洋の宗教であるキリスト教を受容したことが日本のそれまでの文化に根本的な変化をもたらさなかったから。

(八) 本文の論旨に照らして、最も不適当なものを次からひとつ選び、番号で記せ。

(1) 丸山真男は、原理としては互いに矛盾するものまでもを包含し、その精神的雑居を可能にしてしまう日本文化の本質的な寛容さについて論じ、そこに文化的な価値付けを内面的に強制するような思想のかたちを見出した。

(2) 「非排他」的で「無限抱擁」的な文化としての日本文化観は、外来の要素を拒絶したり変化させてしまうことも多い日本の文化受容の実態にはそぐわない観点であり、そこで起きる異文化との融合も無視すべきではない。

(3) 従来のものとは異質であるがゆえにその受容者の既成観念を揺らがせかねない新しいものに対しては拒絶反応を起こすという文化的傾向が日本にはあるが、それ自体は日本社会を特徴付ける固有の現象という訳ではない。

(4) 日本の異文化受容を論じる際に陥りがちな、「日本的なもの」を実体化するという陥穽を回避して、その文化受容の動態を把握するために生み出されたメタファー表現が、丸山真男の言うバッソ・オスティナートである。

(5) 日本文化の雑種性は、土着の世界観と異文化由来の要素を共生させるという日本の文化的特性の内に見出されるが、その根底には〈閉ざされた社会〉と〈開かれた文化〉という一見矛盾した日本社会と文化の実態がある。

(九) 日本の宗教の固有性として広く認められている特質を最も端的に示した箇所を、本文全体の論旨を踏まえて、十五字以上二十字以内で本文中から抜き出せ。

(十) 二重波線部に〈日本文化の〈免疫システム〉という比喩〉とあるが、この比喩が示すところの内容を四十字以上五十字以内で具体的に説明せよ。なお、この解答に際して、本文中の語句は用いてよいが、本文からの抜き出しのみの解答は認められない。

2

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

むかし今をしらず。*伯耆の国*大智大権現の御山は、恐ろしき神のすみて、夜はもとより、昼も A の時過ぎては、寺僧だにくだるべきは下り、(イ)行ふべきはおこなひ明かすとなむ聞ゆ。麓の里に、夜毎わかきあぶれ者等集まり、酒のみ、*博奕打ちて、争ひ遊ぶ宿あり。けふは雨降りて、野山のかせぎゆるされ、午時よりあつまり来て、跡無きかたり言してたのしがる中に、*腕だてして、口こはき男あり。憎しとて、「おのれは強き事いへど、お山に夜のぼり、(ロ)しるし置きて帰れ。(1)さらずば、力ありとも心は臆したり」とて、(ハ)あまたが中に恥かしむ。「それ何事かは。(2)こよひのぼりて、正しくしるしおきてかへらむ」とて、酒のみ物くひみちて、小雨なれば、蓑笠かづきて、ただ今出でゆく。友達が中に、老いて心有るは、「無やくの争ひ也。渠必ず神に引きさき捨てられん」と、B ひそめていへど、追ひ止めむともさらにせず。

此の大蔵と云ふは、足もいとはやし。まだ日高きに、御堂のあたりにゆきて、見巡るほどに、日やや傾きて、(ニ)物凄じく風吹きたち、檜原、杉むら、さやさやと鳴りとよむ。暮れはてて人なきにほこり、「此のあたり何事もなし。山の僧の驚かすにこそあれ」とて、雨晴れたれば、みの笠投げやり、火切り出だしてたばこのむ。いと暗う成りて、さらば*上の社にとて、*木むらが中を、落葉踏み分け、ふみはらかしてのぼるのぼる。*十八丁とぞ聞きし。ここに来て、何のしるしをかおかんとて見巡るに、*ぬさたいまつる箱の大きなるが有り。「是かつぎて下りなん」とて、重きをかるげに打ちかづきてんとするに、此の箱のゆらめき出でて、手足おひ、大蔵を安々と引き提げ、空にかけり上る。ここにて心よわり、「ゆるせよ」「助けよ」とおらべど、こたへなくて、飛びかけり行くほどに、波の音のおどろおどろしきを聞き、いと悲しく(ホ)、ここに打ちはめられやするとて、今は箱をつよくとらへてたのみたり。夜漸く開けぬ。神は箱を地に投げおきてかへりたり。

（上田秋成の『春雨物語』による）

*（注）伯耆の国――現鳥取県西部。
大智大権現――大山にある大山寺の奥の院、大山智明大権現。

あぶれ者――無法者。
博奕――博打。賭博。
かせぎ――仕事。
跡無き――根拠のない。
腕だて――腕自慢。
口こはき――言葉つきの荒々しい。
上の社――奥の院。
木むら――茂み。
ふみはららかし――踏み散らかし。
十八丁――二〇〇〇メートル弱。
ぬさたいまつる箱――賽銭箱。

〔設　問〕

(一) 傍線部(イ)「行ふ」(ロ)「しるし」(ハ)「あまた」(ニ)「物凄じく」(ホ)「悲しく」をそれぞれ口語訳せよ。

(二) 空欄 A B を補う言葉として、最も適当なものは次のどれか。それぞれ番号で記せ。

A (1) 丑　(2) 卯　(3) 未　(4) 申　(5) 亥

B (1) 声　(2) 眉　(3) 身　(4) 心　(5) 姿

(三) 二重傍線部(1)「さらずば」(2)「何事かは」をそれぞれ口語訳せよ。ただし、(1)は「さ」の内容を具体的に記すこと。

(四) 波線部の「神」は、本文では具体的にどういう恐ろしい力を発揮しているか、大蔵の能力と対比しながら、具体的に説明せよ。

(五) 「神」はなぜ恐ろしい力を発揮したのか、その理由を具体的に記せ。

(六) この本文は、一つのまとまった怪談になっている。怪談においては、しばしば恐ろしい事件の予言が行われる。本文では、予言は、誰のどのような言葉として示されているか。具体的に説明せよ。

3

次の文章を読んで後の設問に答えよ。ただし、設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた所がある。

昔者衛君朝*ス於呉。呉王囚レ之ヲ、欲スレ流サントヲ之ヲ於海ニ。説ク者冠*蓋相ヒ望メドモ、而弗レ能ハレ止ムル。魯君聞キレ之ヲ、*撤テツシ鐘鼓之懸ヲ、*縞シテ素ス*而朝ス。仲尼入リテ見ヘテ曰ク、君胡為有憂色(1)。魯君曰ク、諸*侯無ク親、以テ諸侯ヲ為スレ親ヲ。大夫無ク党、以テ大夫ヲ為スレ党ヲ。今衛君朝スルニ於呉*ニ、呉王囚ヘテレ之ヲ、而欲スレ流サントヲ之ヲ於海ニ。孰カ意ハン衛君之仁義ニシテ而遭フ此ノ難ニ也。吾欲スレドモ免レシメントレ之ヲ而不レ能セ、為スコト奈何ン。仲尼曰ク、若シ欲スレバ免レシメントレ之ヲ、則チ請フ*子貢ヲ行カシメヨ。魯君召シテ子貢ヲ、授ク之ニ将軍之印ヲ。子貢辞シテ曰ク、[A]。在リ所レ由ル之道ニ。*敝メテレ躬ヲ而行ク。至リ於呉ニ、見ユ*太宰嚭ヒニ。太宰嚭甚ダ悦ビレ之ヲ、欲スレ薦メントレ之ヲ於王ニ。子貢曰ク、子不レ能ハ三行キテ説クコト於王ニ(2)、奈何吾因レ子也。太宰嚭曰ク、子焉ンゾ知ラン嚭之不ルヲ能セ也。子貢曰ク

衛君之来也、衛国之半曰不若朝於晋、其半曰不若朝於呉。然衛君以為、呉可以帰*骸骨也。故*束身以受命。今子受衛君而囚之、又欲流之於海。是賞言朝於晋者、而罰言朝於呉也。且衛君之来也、諸侯皆以為*蓍亀兆、(1)今朝於呉而不利、則皆移心於晋矣。子之欲成*霸王之業、不B難乎。太宰嚭入、復之於王。王報出令於百官曰、比十日而衛君之礼不具者死。子貢可謂知(2)所以説矣。

（『淮南子』人間訓による）

*（注）朝――朝貢すること（みつぎものを持って来朝すること）。下位の者としての礼。
冠蓋相望――冠は使者の冠、蓋は使者の車のおおい。使者がひきもきらさずおしかける様。
撤鐘鼓之縣――死を目前にした者に対する礼で、室内にかけた楽器を取り去ること。
縞素――白い絹の喪服、もしくはそれを着ること。
朝――朝廷に臨むこと。この箇所のみこの意味で用いている。

仲尼――孔子の字。

諸侯――周王朝の封建諸国。本文中の衛・呉・魯も各々諸侯の一国。

呉――原本は呉王。王念孫の説により王を削除した。

子貢――孔子の弟子。孔門十哲の一人。

斂躬――身をひきしめること。謹しむ様。

大宰嚭――宰相の伯嚭。

帰骸骨――骸骨はここでは身体のこと。身を預けること。

束身――斂躬に同じ。

蓍亀兆――蓍は筮竹、亀は亀の甲羅。両者とも占いに用いて吉凶の兆を察知するためのもの。これと同様の判断の予兆。

霸王之業――霸王は霸者（諸侯の旗がしら）と王者、もしくは一語として霸者のこと。天下を統一して治める事業。なお、霸は武力で、王は徳力でそれを達成するニュアンスがある。

〔設　問〕

(一)　傍線部(1)をすべて平仮名で書き下し文にせよ。

(二)　傍線部(2)の書き下し文として最も適当なものは次のどれか。番号で記せ。

(1)　奈何せん、吾、子に因るなり。

(2)　奈何ぞ吾、子に因らんや。

(3)　吾、子に因るを奈何せん。

(4)　奈何なる吾ぞ、子に因るは。

(5)　奈何ん、吾、子に因らん。

(三) 空欄 A は、「貴きは患ひを解くに益無し」と訓読される原文が入る。次の六つの漢字を並べ変えて原文を復元せよ。答えは番号で記せ。

(1) 解　(2) 於　(3) 貴　(4) 無　(5) 益　(6) 患

(四) 空欄 B に入る漢字を次から選び、番号で記せ。

(1) 又　(2) 亦　(3) 復　(4) 還　(5) 股

(五) 二重傍線部(1)の「今」と同様の意味を持つ漢字を本文中から探し出して記せ。

(六) 二重傍線部(2)の「所以」と同様の意味を持つ漢字一字を本文中から探し出して記せ。

(七) 波線部のように子貢が言ったのは何故か。次の中から最も適当なものを選び、番号で答えよ。

(1) 宰相の伯嚭は呉王の信頼が全くなかったので、彼の推薦はきっと受けつけられないと推察したから。

(2) 宰相の伯嚭に呉王を説得させるために、先ず彼の自負心を刺激してその方向に導こうと考えたから。

(3) 宰相の伯嚭はすでに呉王の説得に失敗しており、彼が関与するのはあまり望ましくないと感じたから。

(4) 宰相の伯嚭と呉王の所に同行したところで、呉王を説得する上で全く頼りにならないと判断したから。

(5) 宰相の伯嚭は呉王に追従する人物だったので、呉王と同調されると説得が難しくなると思ったから。

(八) 衛の君を解放するために子貢はどのような形で説得をしたのか。本文の内容を基にして次の空欄Xに適当な言葉を補って答えよ。なお、字数は五字以上十五字以内とする。

衛の国が X となり、
諸侯が X となり、
その結果、「霸王」の偉業が達成できなくなる。